

G-4 外来ベルケイド療法に移行した多発性骨髄腫患者の不安に対するチームアプローチ

○風間美奈子、田村千草、五十嵐聡子、田澤祐美、堀 富士子

新潟県立がんセンター新潟病院 東7病棟

【目的】当院でのベルケイド治療は初回時には入院で行い、2コース目以降は外来での化学療法に移行していくことが多い。私達は入院中に在宅療法をイメージして生活指導を行っているが、効果的だったかどうかは把握できていない。患者が外来で化学療法を継続していくには、治療に伴う副作用症状と生活とのマネジメントやコントロールが不可欠であり、患者自身がセルフケアしていかななくてはいけないことが多くなる。退院後の生活の大変なことや困ったことを知ることで、入院中から退院後の生活をイメージしたチームアプローチの方法を探る。【方法】対象者はMMでベルケイドの初回治療を受け、PSが0～1で外来でベルケイド治療を行なっている患者である。同意を得た患者に独自で作成したインタビューガイドを使用し、インタビューを実施した。【結果】対象者の年齢は50～76歳。副作用症状は出現したが、日常生活に支障のない程度だった。どの対象者も副作用については、薬剤師が入ることで十分理解できていた。対象者のうち3名は、入院前と変わらず仕事を継続できているが、「高額な治療費と生活費の面での不安」を抱えていた。また、「体力が続くか病状は進行しないかなどの身体的な不安」も訴えていた。【結論】患者が退院後抱える不安が明らかになった。患者が安心して生活を送れる為には、医師・看護師・薬剤師・SMWと協同したチームアプローチが必要である。